天の曳航

高瀬千図

天の曳航

高瀬千図

講談社

〈著者略歴〉
昭和20年長崎県生まれ
昭和59年「イチの朝」で芥川賞候補
同59年「夏の淵」で『新潮』新人賞受賞
同作品で芥川賞候補
昭和63年「風の家」で三島賞候補

天の曳航（えいこう）　定価　一四〇〇円

第1刷発行　昭和63年8月20日

著　者　高瀬千図
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社　講談社
〒112　東京都文京区音羽2―12―21
電話　東京(03)945―1111(大代表)

印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

© TIZU TAKASE 1988 printed in Japan

ISBN4-06-204029-8 (0) (文2)

目次

一章　天の曳航　5
二章　海人　73
三章　みいらく　149
四章　蓮華化生　189
五章　音楽　239

装幀　安彦勝博
装画　藤井瑞子

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

天の曳航

一章　天の曳航

陽が沈みかけていた。幾重にも重なりあった岬がオレンジ色の大気に染めあげられ静まり返っている。夕凪の海は次第に色を変えていき、渚に寄せる波が桐の花でも開いたように淡く色づく。海の面に浮かぶ雲の上を舟が渡っていく。

知恵は畑仕事の手を休めて入り江に目を落とした。椿の葉が濡れたような光沢を見せている。渚に降りていきながら浅緑の葉を一枚摘みとり噛んだ。樹液の匂いが口の中に広がる。潮で汚れた手を洗う。汗ばんだ首筋を微かな風が撫でていく。

岬の尾根伝いに戻っていきながらこれほどまでに匂い立つ春の大気がふくらみ胸を満たすのはあの男が村に帰ってきたからだと知っていた。宙を歩く心地がする。木立の中に紅色の花をつけているウツギですら自分の思いが花になり開いている気がする。

足を止めたその目の先で小枝にかかった蜘蛛の巣が微かな風に揺れる。この蜘蛛の糸で織った衣があるならばそれをまといあの男にかたわらにいて髪を弄ばれてもみたいと思い、自分の思いをもてあまして知恵は溜め息を漏らした。

河口まで降りた。夕暮れまでにはまだ間があった。河沿いに漁師の家が並ぶ。干した網が風に揺れ磯の匂いをさせている。知恵は河をのぞきこむ。小魚が群れをなしてさざなみのように河面を渡っていく。夕風がその後を追う。水面の光が揺れて広がる。

「なに見よる」背後で男の声がした。知恵は一瞬身を硬くする。あの男の声だった。知恵は振り仰ぐ。男の背後で陽が沈みかけ、最後の光を放っている。眩しさに涙がにじんだ。

男は知恵の横にきてしゃがみこみ、知恵の視線の先を追う。

「あれなんやろ」

「ボラ子たい。河の汚れっしもうてチヌもなんもおらんごとしなっとる」

「今度はどこに行ってきた」

「高千穂て知っとるね。宮崎さ。ダム工事に行っとったと」

陽に焼けた直志の横顔がまぶしかった。直志の体からそれまで知恵の知らなかった匂いが立ちのぼっている。汗の匂いでもなく海の匂いでもない。体液の匂い、陽に焼けた荒い肌の匂いだった。ランニングシャツの後が首に白く残っている。知恵はふいに息苦しくなり立ち上がる。それを見た直志が、「ほう、また背の伸びたったいね」とからかう。「なに言いよる。うち、もうじき二十三になるとに」

「知恵が二十三か。俺が中学の三年の時、お前は小学校に入ったとやもんね。赤毛ば三つ編みにして白かリボンば結んで、ランドセルん方が大きかったもんな」

笑っている直志の目が一瞬濃い陰りを帯びて知恵を見る。

「いつまでおる」訊いた声が喉にねばりつく。知恵はそう言いながら自分の胸に揺らめきたつものを隠すことも忘れて直志を見る。直志もまた知恵の目の色を映し返す。

「今度はちっと長うなる。知恵の顔ばよう見ておりたかしな」直志は冗談めかして言いながら知恵の目の奥をさぐるように見た。息が詰まり頬が赤らむのがわかった。それでもなにげない振りを装って「父ちゃんにならすとやもんね」と知恵は言い、自分の思いを塞ぐように直志に背を向け歩き出す。

三年前、直志との間に結婚の話が持ち上がったときはまだやがてこれほどの思いにかられようとは思ってもみなかった。それがいつこうなったのか知恵にも分からない。

一年前、祇園祭の夜、昼間部落ごとに競い合ったペーロン競漕の熱気に煽られたように波止場に行こうと誘われたときからだろうか。直志は時折りふいに濃い目の色で知恵を見るようになった。その時から河口から海へと水を切って進む極彩色に彩られた早船の舳先でドラを打ち鳴らす直志の姿が知恵の目にも初めて出会った人のように違って見え始めたのだった。それでも嫁を迎えて一年にもならない直志に思いを深くしてはならないと思い、夜の波止場で直志と並んで昼間の熱の残る岩の上に腰を降ろしているときもことさら無邪気を装ってみせたのだった。直志もまた妹分を扱うように扱った。それっきり直志はまたどこかの飯場に出ていき、盆に一度帰ったきり顔を合わせることもなく一年が過ぎた。

ただその時から山の中に風に誘われるように踏み入ったときなど決まって知恵の中にやさしげに笑いかける直志の顔が浮かぶようになった。海の見える小高い丘の樫の木の下で一人もの思うでもなく草を嚙み風に吹かれて木々のざわめきを聞いている。

押さえていただけ直志への思いは鮮やかさを増していた。

河沿いの道を歩いてくる知恵をオツタが悪戯でもしてきた子供を見るように見て笑いかける。

「女子が一人でどこさん行きよる」

「うちの秘密の場所。どこからも見えんとこ。海の一人占めできる場所のあるとさ」
「どっからも見えんちや。そげんところのあるもんな」
「嘘。今畑から帰りよると。オツタ婆はなん言いたかと」子供がざれかかるように知恵はオツタの肩を押して歩く。
「ようっとまあ、知恵さんなわが体のどげん見ゆるか知らっさんもんな。若竹のごと伸びた若っか女子はこん婆の見ても気持ちのよかとに、そげんことの分からんでおらす」
「そいがなしていかん」
「いかんいかん。男たちには目の毒たい。腰はしまっとるし、胸も張っとる。まぶしかごとあったい」
「どこが」知恵は立ち止まり、自分の姿を見降ろして言う。
父親の古いシャツを着て畑仕事に出ていく知恵を若い女のくせに着るものに頓着もしないと母親のミツを嘆かせたことを思い出し、婆は考えすぎとると頬をふくらませる。
「けどなんて婆に言われてもうち毎日海見ておりたかし、風に吹かれておりたか」
高校を出て大阪で働いていたときも人に馴染めず、海が恋しい、木々の匂いが恋しいと思い暮らした。空を映して朝な夕な色を変える河を思い、漁から帰ってくる舟の櫓の音を水の音を思い出してやもたてもたまらず大阪駅に行き、列車の時刻表を眺めていたこともあった。思いが激しくなると海の夢を見た。瑠璃色の入り江も岬の濃い山桃の茂みも現実の色よりも鮮やかに現れて消える。
帰ってきてからは恋しい人に会いに行くように海に出る日は胸が昂ぶった。
「婆、こんげんきれかとこに住んどるだけでうち幸せでならん。朝早ように起きて河見るやろ、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ああ、河がある、て毎日安心しよる」
「そうたいな、こん婆にも思いあたることのあったい。けど知恵さんなちっと普通とちごうとらすけんな」オッタは笑う。
木々の梢を払い渚に降りて足を浸す。岩に這いつくばって海の水を舐める。知恵はそのたびに自分が人ではなくしなやかな肢体を持つ獣にでもなった気がした。
オッタにいくらたしなめられてもやめる気になどならなかった。
「婆、後で浜に行こ。日の暮れんうちに行ってミナ取ってこよ」
「あってまあ、まだ水の冷たかろうに」
「一人で行っちゃならんて言うたくせに」
「はいはい、行きまっしょ」
家に行く路地の前まで来てオッタは足を止め、直志に会ったかと聞いた。ふいを突かれて知恵は頬を赤らめる。俯いた知恵にオッタは気遣わしげな目の色を見せ、言いかけた言葉を飲みこんで、後でなと言いおいて路地を入っていった。

「直志の戻ってきとったたい」ミツは良国の茶碗に酒を注ぎたしながら言った。
「明日ん朝から漁にでるごと言いよった」
「今度はおとなしゅう宣義しゃんの手伝いでんするつもりやろか。富枝に会うたら子供の生まるっとやけんおってもらわんばて言いよる」
知恵は先に飯を済ませてしまい流しに立った。直志の声が耳に残っていた。胸に甘やかなものがゆらめき立つ。富枝が身籠もっていると聞かされても思いはふくらむばかりだった。他所の空

気を吸って帰ってきた男はことさらまぶしく見えた。なにげなく洗いものの手を休めふと流しの前の窓の外に目をやると直志の顔が浮かんでいる。暗がりに目を落としたときも知恵を見た直志の目の色が思いだされた。胸の中にたたみこんでいた思いがなにかのはずみに鎖をとかれ、今だかつて知らない生き物のように知恵の中で動き始めている。

飯が済み、良国は外へ出て行った。隣りの男と漁の話をしている。

「知恵、明日の市場行きは代わってくれんな」ミツが来て言った。肩を手で揉みながらいかにも頭痛がするというように眉間に深い縦皺をつくっている。「持病のでたごたる」

「よかよ、明日も天気のよかろうけん、なんかあがるやろし」

「よかとはちっとんあがらん。セイゴのごたるもんばっかりでどうってならんたい。ようっと背中に鉄の棒でん差しこまれたごたる」ミツは上がり框に腰を降ろして言う。

「後で揉んでやるけん待っとって」知恵は洗いものを片付ける。

花の匂いの濃くなる季節になるとミツはきまって眩暈を起こした。こめかみが張り胸がつかえるとものも食べなくなった。

開いた窓から微かに湿りをおびた夜気が流れこんでくる。豊潤な花の匂い。蓮華も菜の花も露に濡れ月の光を浴びている時間だった。ミツが足を引きずるようにして納戸へ行った後、知恵は流れこんでくる夜の大気を胸いっぱいに吸いこんだ。目の中で直志の顔が揺れていた。

目覚めてしばらく知恵はまだ昨日の続きのままもの思いのなかにいて河を上ってくる舟の櫓のきしみを聞いていた。薄青く明け始めた空がしだいに光を増していく。知恵、と襖越しにミツに何度か呼ばれてやっともの思いを振り払った。

「もう舟の戻ってきよるやろ。起きてくれんな」
「起きとるけん心配いらん。後でお粥さんこしらえるけん、ちっと待っとって」
冷たい水で顔を洗い髪をとかして後ろできつく束ね知恵は表に出ていった。河面をすみれ色の靄がうすものを広げたように渦を巻きながら流れていく。山の稜線が金色に縁取られている。星の消えた空は薄青い真珠色に輝き始めていた。良国の舟が橋をくぐって戻ってくる。その後に菊男の舟が続く。
良国は河の瀬になったところで櫓を竿に持ち代えた。矢倉に舟をつけると艫綱を知恵に投げた。
「なんのかかった」
「セイゴばっかりたい。一キロばっかりのチヌのいっちょはいっとるたい」
「セイゴじゃ高うには売れんね」知恵は良国から水の垂れる籠を受けとる。良国はいけすからチヌを出した。銀色の魚は勢いよく舟板を叩く。良国はそれに手鈎ですばやく殺しを入れる。
「坂田んとこも見て来い。渡り蟹ば上げよったけん、預かって行ってやれ。こんあたりよりちっと高うに売れるたい」
商い用のブリキ缶に軍手をはめた手で籠の中の魚を選り分けて投げこんでいく。魚は潮の匂いをさせてエラをひくつかせる。銀色の鱗が光る。
ブリキ缶を肩にぶらさげ知恵は河下へ行く。朝日がのぼった。矢倉においた露がきらめく。山が呼吸でもするようにオレンジ色に染まる。坂田の家の前の矢倉に直志がいた。濡れた網を竿に干している。知恵を見て笑いかけた直志の歯が朝日を受けて光った。
「渡り蟹のあがったとやろ。市場に持っていこうか」知恵は声をかけた。

「上がったて三キロぐらいのもんたい」
「三キロでん馬鹿にならんよ」知恵は矢倉に上がり籠の中を覗きこむ。蟹が泡を吹きながら籠を這いのぼろうとしては落ちるのを知恵が笑うと、直志は横にきてしゃがみこむ。蟹をつつく。直志の腕が知恵の腕に触れる。蟹を取り出し藁で鋏をくくった。いけすの海水で濡らした新聞紙でくるみブリキ缶に入れた。立ち上がり缶の紐を肩にかけようとした知恵の手に直志が手伝う振りをして自分の手を重ねる。
「来とったあ」富枝の声がした。直志が慌てて手を引いた。直志は河に目を移す。富枝は少しせりだしてきた腹をかばうように手をあてがって矢倉に上がってきた。「母ちゃんなどげんあらす」
「毎年のことやろ。今時分になっと眩暈のしよらす」
パーマをかけたばかりの富枝の髪が匂った。ロットを巻いた跡が額の生え際にくっきりと残っている。それを見ている知恵に気付いて「駅前の新しか美容院まで行ってきたとよ」と言う。
行ってくるからと言いおいて矢倉を降りた知恵に直志は曖昧な笑みを浮かべた。目から表情が消えている。悪かねえ、と直志の横に立った富枝が言った。

市場の人通りのある方に知恵はブリキ缶の蓋を開けて並べた。広げた新聞紙の上に腰を降ろし人が寄ってくるのを待った。横に外海から来た女たちが花を売っている。
「オミツしゃんの娘な」中の一人が声をかけてきた。「お母しゃんなどげんかしとると」
「具合の悪うしなって寝とるけん、代わりに来たと」
「そういやそうたい。去年の今時分な出てこらっさんやったもんな」もう一人が言う。
「よか娘ば持たしたたい。うちんとはこげんとこに商売に来るとは体裁の悪かて親のうちが来る

とも好かんとにな」
昼までに粗方売れてしまった。知恵は軽くなったブリキ缶を持って立ち上がった。
「昼飯にしゅうかいね。食べなさらんな」女の一人が経木に包んだ握り飯を差し出す。
「おおきに。けどこいから家に帰ってお粥つくらんならんけん」
「そうたいな。病人さんのおらしたたいな」女は笑う。知恵はその女から金盞花を一束買った。
女たちに挨拶をして知恵はバス停へと歩いた。金盞花は一身に陽を集めたような花だった。健康な百姓女のようなその花が知恵は好きだった。黒々と肥えた土からたっぷりと養分を吸い上げた太い茎は姿に似合わずひそやかな香の匂いがする。
バスには男の客が一人乗っているだけだった。街を抜け山合いの道に入りやがて視界が突然開けて青い春霞に包まれた山の際まで続く菜の花と蓮華畑が見えた。蓮華の淡い紅色はいつのまにか腐りかけた紫紅色に変わり黒い莢すらつけている。バスが止まるたびに開けた窓から流れ込む匂いは身のほども知らぬげに甘さを増し虫を呼んでいる。知恵は直志を思った。匂いは知恵の髪にまつわり身体にしみて鮮やかな血に溶ける。

知恵は売り上げを届けに直志の家に行った。矢倉の上に宣義と富枝がいた。言い争う声が聞こえていた。知恵を見て宣義が黙った。手荒にたこつぼを片付け始める。
「女ん体ばいとう気のちっとんなかとね。男世帯の三人分も洗濯せんならんうちの身になってくれなしてもよかろうに。知恵ちゃんも言うてやって。裏のカケまで上るとはこん体ではようっときつうしてさ。矢倉に洗濯もん干しちゃならん規則でんあろうばしのごと」
「決まりたい。矢倉は海の神の寄っていかすところぞ。そんげんもんば干してよかもんな」

宣義は目をむいて怒鳴る。陽に焼けた赤銅色の顔に太い皺が刻まれている。汚れたランニングシャツの胸で手を拭きながら、「この辺の女はそげんことはせん」と低い声で言う。それを聞き咎めて富枝はまた顔色を変えた。

「なら、この辺の女に嫁に来てもらわんな。人ば騙すごとして連れてきとってから」腹に据えかねるというように富枝は口をとがらせる。頬にみるみる臙脂色の赤みが差してきて、富枝は泣き始める。洗濯物をその場に投げ捨てると家の中に駆けもどっていった。

「他所から嫁もらうと一から教えんならんたい」宣義はひとりごち、洗濯物を拾う。

「全部売れたけん、これ」知恵は輪ゴムでまとめておいた売り上げを出した。

「おおきに。オミツしゃんな加減はどうね」

「じきようなるやろ。花の匂いのせんごとなれば頭の痛かとも取れよる」

宣義は五百円札を抜き取り歩合にと知恵に渡した。

「いらん。どっちみちうちん家のもんば持っていくついでやけん。おじさんの焼酎代にせんね」知恵は札を押し返した。ほんなら、おおきに、と宣義は札を腹巻きに押し込む。

「知恵もそろそろよか婿ば見付けんならんな」機嫌のいい顔で宣義が言った。

家に戻ってみると良国は風のとおる座敷で寝ていた。奥で人声がしていた。納戸で寝ているミツのそばにオシズが座り話しこんでいた。

「アキちゃんなどげんしとる」知恵が訊くと、「仕事行きよる。店の主人にそりゃあ大事にしてもろて。おかさんにやってくれんなちこん間もよかブラウスば二枚も持たせてやりよらしたもん」自慢げオシズは言う。

「アキちゃんなしゃきしゃきよう働くもんな」横になったままミツは相槌を打った。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com